（別添）

令和５年度「ちばっ子の学び変革」推進事業（「学力・学習状況」検証事業）研究状況報告書

富里市立富里南中学校

１　学校紹介

富里南中学校は昭和６３年に創立、学区は富里市の南に位置する。生徒２３８名、職員２２名、学級数９（うち特別支援学級２）の中規模校である。

２　研究主題

内容を読み解き、自分の言葉で表現する力をつけさせるための工夫

～主体的・対話的で深い学びの視点に立った活動を通して～

３　研究の概要

（１）生徒の実態と課題

令和４年度全国学力・学習状況調査（６年生時）において、国語「記述式」の問題を解くこと、「読むこと」に課題がみられた。特に、「文章を読み、自分の知識や経験と結び付けて自分の考えを書く」ということに大きな課題がみられた。また、馴染みのない語句、概念が含まれた説明的文章のように長い文章の内容を読み解くことも課題であった。

（２）学力向上のための取り組み

全教科で必要な「内容を読み解き、自分の言葉で表現する力」をつけさせるために、今年度からすべての基礎である国語科の研究に取り組むことにした。

〇初見の文章を多く読み解く訓練を重ねていけば、馴染みのない語句、概念が含まれた内容を読み解く力の向上を図ることができるであろう。

〇授業や定期テストを通して長文を読み、その中から必要な語句同士をつなぎ合わせ、自分の言葉として表現する機会を多く設けることで、記述式の問題を解く力の向上を図ることができるであろう。

という仮説を立て、研究を進めた。

①　理論研修

北総教育事務所 古川友行指導主事より「書くことが苦手な生徒への支援」について、講義を受け研修を行った。内容は以下の通りである。

少人数指導によって、生徒は「まず書いてみる」という意識が芽生えた。ひな型によって書きやすさが生まれ、抵抗なく書くことができるようになった。今後は、教師側がヒントを減らしていき、生徒が自分の力で書けるようになったと感じる頻度を増やすことが効果的であると学んだ。

良い見本を提示することや良い文章を共有することが「書く力」向上のポイントである。新聞のコラムや美しい言葉・表現ができた作品を見て、自分の手立てとさせることも大切である。

② 継続した「書く活動」の検討・実施

「書く活動」を年間通して継続的に行い、思考力・判断力・表現力につなげていくため、国語科の定期テストには、毎回２００字作文を実施した。

道徳の感想文や美術の鑑賞文、行事後の振り返りシートを通して、学校全体で「書く活動」を継続して行った。

③ 少人数指導による読解演習・作文演習

教科書の単元とは別に、初見の文章を読み解く授業を設定した。

２００字の意見文を１０分で書く授業を毎月２回程度行った。

④ 視写・速音読の実施

富里市では「とみの国検定」という取組を行っている。「とみの国検定」は、学力向上を目的として、小学１年～中学２年を対象に、視写と計算に取り組むものである。中学生は５分で２００字以上、１０分で４００字以上の文章を視写することが目標である。視写は、インプットとアウトプットを繰り返すことで記憶力を向上させることができる。また、集中力も高まる。ＩＣＴ活用が推進される現代では、板書を書き写したり、メモをとったりすることに不慣れな生徒も多い。家庭学習として視写に取り組み、５分検定と１０分検定を使い分けながら調査を行った。

速音読は、音読や読解演習を行う過程で必要性を感じ、実施することにした。速音読には脳を刺激する効果があると言われている。毎回授業開始時に、有名な文学作品の一部を１分程度で読み切れる量にし、タイムを計測する。

視写・速音読は、いずれも同じ内容を２～３度繰り返し行う。一度に捉えられる文の量が増え、馴染みのない言葉にも関心が高まることを目的としている。

（３）加配教員の活用

本校では、加配教員を少人数指導として位置づけ、国語科の授業実践に取り組んだ。

【少人数】

問題演習（長文の読解の仕方、答え方）、作文演習（意見文の書き方、根拠を明確にした文章の書き方）の際に、少人数授業を行った。

少人数指導では、「質問がしやすい」「また行いたい」という生徒の意見も多く出た。少人数指導は、自分の考えや答えに自信をつけるために有効であった。作文指導では、授業内に添削することができ、適切な言葉遣いやよりよい表現を共有することができた。「書くこと」に関しては、個人差が大きいため、苦手としている生徒にとって少人数指導は大変効果的であった。

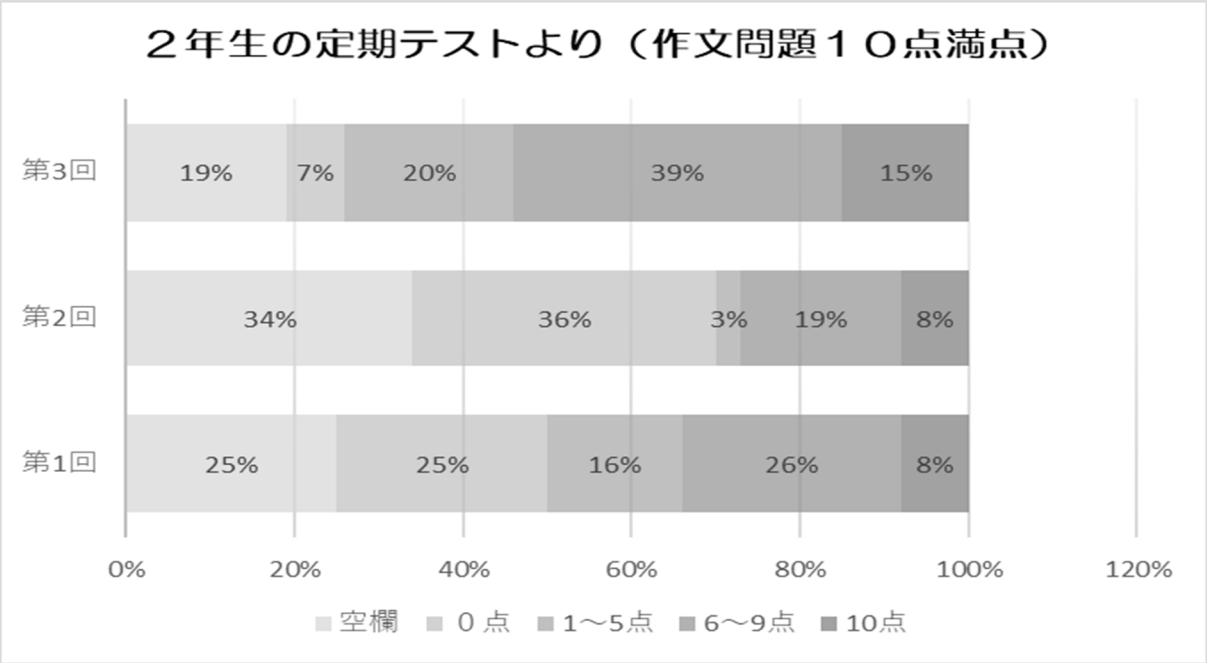
４　成果

〈２年生の定期テストより〉（作文問題１０点満点）

第１回：「日本の〇〇の魅力」

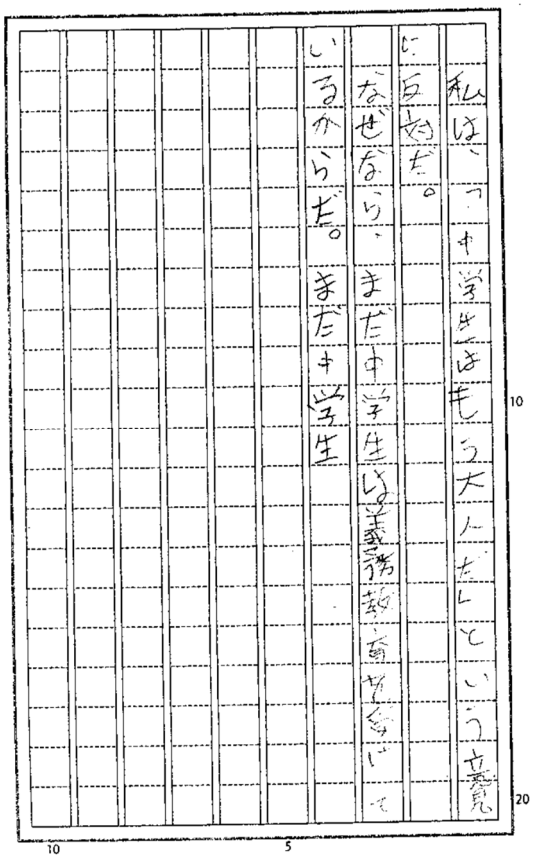
第２回：「敬語の効果」

第３回：「手書きの良さ」

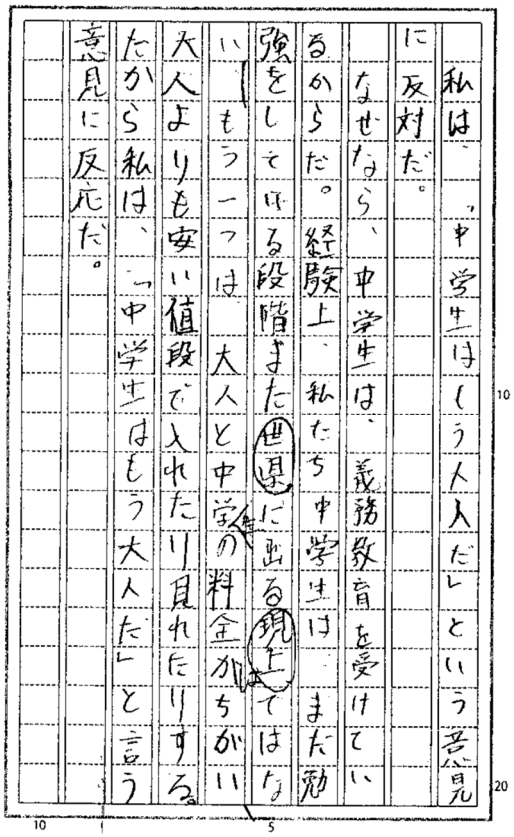


〈１年生の作文演習より〉（２００字１０分作文）

５月実施



１１月実施



私は、「中学生はもう大人だ」という意見に反対だ。

なぜなら、中学生は、義務教育を受けているからだ。経験上、私たち中学生はまだ勉強をしている段階また世界に出る現上ではない。もう一つは、大人と中学の料金がちがい大人よりも安い値段で入れたり見れたりする。だから私は、「中学生はもう大人だ」と言う意見に反対だ。

私は、「親しくなった先輩に敬語を使わなくてもよい」という意見に反対だ。

なぜなら、親しくなっても上下関係は変わらないからだ。私が一度、見たことがあることは、ある友達が、年上の人に敬語を使わっていなく、なんでタメロなんたらうと思っていい人に見られたらなんであの人年上の人にこれが私だったからよかったのですか知らなタメロなんたらうとかんちがえされていまう場合があるため、私はこの意見に反対だ。

○継続して「書く活動」に取り組むことによって、作文問題への抵抗がなくなってきたことがわかる。

○「意見文の書き方」や「根拠を明確にした文章の書き方」を少人数指導で学ぶことによって、書くことに自信がつき、「書いてみよう」と感じる生徒が増えた。

○少人数指導によって、教師側も細かな添削ができた。生徒はお互いの作文を読み合い、表現を共有できた。

○視写や速音読を継続して行うことで、文章を文字として捉えるのではなく、文や文章として捉えることができるようになった。

5　今後の課題

▲筆者の考えや登場人物の言動を読み解き、文章の言葉やキーワードを使って自分の言葉で表現する力が必要である。

▲美しい言葉や表現にたくさん触れることが必要である。さらに、学んだ言葉をアウトプットする場を設け、自分のものにするための時間を確保することが課題である。